ISSN 0919-7850

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

名大トピックス

No.114 平成14年11月29日発行　名古屋大学総務部企画広報室 編集　〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Tel(052)789-2016
ホームページ URL　http://www.nagoya-u.ac.jp

名古屋大学全学同窓会（NUAL）を設立

▲総会・記念講演会

同窓会役員▶

CONTENTS

名古屋大学全学同窓会（NUAL）を設立…… 2
法学部同窓会を開催…… 3
工学部が創立60周年記念講演会及び祝賀会を挙行…… 4
国際嚶鳴館の銘板上掲式が行われる…… 5
公開講座（東山地区）・ラジオ放送公開講座終わる…… 6
理学部・理学研究科外部評価報告書を刊行…… 7
医学系研究科が職場のメンタルヘルス講演会を開催…… 7
医学系研究科が看護学専攻、医療技術学専攻
及びリハビリテーション療法学専攻の設置記念式典を挙行… 8
医学部医学科公開講座を開催…… 9
環境医学研究所が国際シンポジウム及び外部懇話会を開催… 10
附属図書館が企画展示を開催…… 11
農学国際教育協力研究センターが
オープンセミナー（第７回・第８回）を開催…… 12
法学研究科がウズベキスタンにおいて学生海外研修を実施… 12
愛知地区国立学校等退職準備セミナーを開催…… 13
日本新聞協会と「新聞大学」を共催…… 14
医学部、献体者の冥福を祈り解剖弔慰祭を挙行…… 14
平成14年秋の叙勲、褒賞受章者決まる…… 15
職員創作美術展開催…… 15
研究ナウ　都市の地震防災力向上のためのコト・モノ・ヒト作りの研究
福和伸夫…… 16
新任部局長等の紹介…… 18
本学関係の新聞記事掲載一覧（14年10月分）…… 19

NEWS

名古屋大学「全学同窓会（NUAL）」を設立

名古屋大学の全学同窓会（NUAL＝ニューアル（Nagoya University Alumni Association））が10月27日設立されました。豊田講堂で開催された設立総会・記念講演会・祝賀会には卒業生、OB 職員、職員など学内外から約600人の参加がありました。

全学同窓会の設立に関しては、国立大学の法人格取得を前にして大学と社会の連携がますます重要になることから、平成13年10月に設立準備委員会が、同年12月には設立委員会が設置され、ここに設立総会を迎えることが出来ました。

本学の全学同窓会は、卒業生だけでなく名古屋大学関係者すべてを構成員とする新しいタイプの同窓会で、大学と社会の交流の核となり、国内だけでなく国際的にも貢献することを目的としています。

全学同窓会は以下の活動を行う計画です。

1．名古屋大学と社会を結ぶ必須の組織として名古屋大学と社会の発展に貢献する。
2．名古屋大学と社会の窓口となり、社会に向けて情報を発信し、情報交換、交流を促進する。そのための社会貢献人材バンク（全学同窓会名簿）を作成する。
3．教育研究活動への参加や支援を教職員・OB にもとめ、講演会など企画行事を行う。
4．研究支援、留学生支援、学生の就職支援などを行う。
5．部局同窓会との連携、支援、懇親会など同窓生の交流を行う。
6．名古屋大学後援会（仮称）の設立支援を行う。

設立総会では、豊田会長（トヨタ自動車㈱取締役名誉会長）から「今後、名古屋大学後援会（仮称）の設立も視野に入れ、名古屋大学を支援していきたい」とあいさつがありました。続いて、記念講演会では、柴田副会長（日本経済団体連合会副会長・日本ガイシ㈱代表取締役会長）の「日本の国際競争力再生への道」

▲設立総会で挨拶する豊田会長

▲記念講演を行う柴田副会長

と題する講演がありました。

その後、シンポジオンホールにおいて開かれた祝賀会では、同窓会役員のあいさつや乾杯が行われ、会の最初と最後に応援団の演舞もあり、盛会のうちに幕を閉じました。

▲応援団

▲祝賀会

NEWS

法学部同窓会を開催

10月27日、午後からの全学同窓会設立総会に先立って、法学部同窓会が法政国際教育協力研究センター（CALE）フォーラムで開催され、同窓生、名誉教授及び教職員ら60名以上が参加し、親睦を深めました。

はじめに、関谷崇夫 同同窓会理事長（昭和30年卒、名鉄顧問・岐阜バス社長）、紙野健二 副学部長、杉浦法政国際教育協力研究センター長及び佐々木副総長からあいさつがあった後、丹羽宇一郎 伊藤忠商事社長（昭和37年卒）による講演が行われました。丹羽氏は、日本におけるコーポレート・ガバナンスのあり方について、同社での実践等を披露しながら持論を展開し、参加者はメモを取りながら熱心に聞いていました。

講演に引き続いて懇親会が行われ、和やかに歓談した後、参加者は全学同窓会設立総会の会場である豊田講堂へと向かいました。

NEWS

工学部が創立60周年記念講演会及び祝賀会を挙行

工学部は、10月27日、「工学部60周年記念講演会」を工学部４号館講会議室において開催し、大学関係者をはじめ卒業生、名誉教授を含め約200名が出席しました。

この講演会は、昭和14年に名古屋帝国大学設立時から設置されていた理工学部が、昭和17年に工学部と理学部に分離してから今年で60年目を迎えたことを記念し、これを機に学科・専攻の枠を越えた交流を活発にし、卒業生と工学部・工学研究科の連携協力を深めるとともに、これまで以上に社会との連携を強め、地域社会への貢献はもとより、産学官連携事業をより一層推進していくことを目的に開催されたものです。

はじめに、安田幸夫 工学部・工学研究科同窓会会長（同研究科教授）から、「同窓会の現状と将来」についてあいさつがあった後、「工学部・工学研究科と社会との連携協力」をテーマに、後藤 研究科長による「名大工学研究科の課題と今後の展望」と題した講演と、同学部の同窓生で全学同窓会の副会長でもある太田和宏 株式会社デンソー特別顧問・豊田紡織株式会社相談役による「我国企業の競争力の現状」と題した講演が行われ、これからの大学と産業界の発展には、同窓会が果たす役割が重要であるとの認識で一致しました。

講演会終了後、会場をシンポジオンホールに移し、祝賀会が開催されました。

▲講演する後藤工学研究科長

▲講演する太田氏

NEWS

国際嚶鳴館の銘板上掲式が行われる

10月11日、名古屋大学国際嚶鳴館の完成を記念して、松尾総長揮毫による銘板の上掲式が行われ、松尾総長、伊藤副総長、末松留学生センター長、小池事務局長及び関係者多数が出席しました。

同館は、学生寮（嚶鳴寮）の老朽化の解消、施設水準やプライバシーに配慮した快適な学修・生活環境の確保、増加する外国人留学生等に対応するため、日本人学生と外国人留学生が共同生活を営む混住型の居住施設として新営されたもので、３棟で構成され、収容人員は292名となっています。居室はすべて個室で、ユニットバス・トイレ、エアコン、ベッド、机・椅子及び本棚等が配置され、共用施設として、キッチン、リビング、洗濯室、多目的ホール等が整備されています。

NEWS

公開講座（東山地区）・ラジオ放送公開講座終わる

平成14年度名古屋大学（東山地区）公開講座〔大テーマ：空間を生きる－生き物と環境の語らい－〕が、10月15日の講義を最後に16回の全日程を終了しました。

最終講義終了後には閉講式が行われ、伊藤公開講座委員会委員長（副総長）から受講生に修了証書が授与されました。

本年度の講座は、「空間を生きる」をキーワードとし、我々人類が手にした様々な空間はどのようなものか、その空間をどのように操り、そこで人はどのように生きるべきか、問題の正確な認識と解決に向けていろいろな角度から取り上げた講義に多くの受講者が参加し、活発な質疑応答が行われました。

また、より多くの地域住民が聴講できるよう同講座の中から10講座を選定し、７月７日から９月８日までの毎週日曜日（７：30～８：00）に、東海ラジオ放送によるラジオ放送公開講座「名大リレーセミナー」を実施しました。放送された内容は、現在本学のホームページ上で公開されています。

（http://www.nagoya-u.ac.jp/att/openseminar/index.html）

なお、来年度は、東山地区公開講座は大テーマを「『越境』を科学する－まざりあい、せめぎあう世界－」、また、ラジオ放送公開講座は東山地区公開講座とは別の独自の大テーマ「東海の大研究―地域の将来を考える―」を設定し、開講に向けて準備を進めており、詳細は平成15年３月頃決定される予定です。

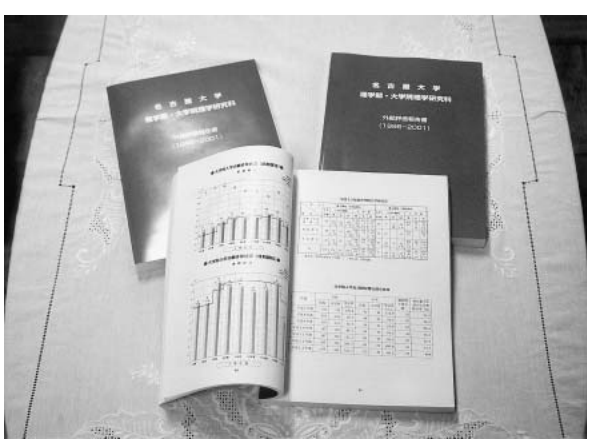
〔本年度受講者数：155名、修了者数：126名〕

▲修了証書の授与

NEWS

理学部・理学研究科 外部評価報告書を刊行

理学部・理学研究科は、３月14日に外部評価を実施し、この度、その評価をまとめた「名古屋大学理学部・大学院理学研究科外部評価報告書（1996－2001）」を刊行しました。この報告書は、総合的な所見と各専攻についての評価概要及び評価資料から構成されており、その内容は、総合的な所見として、研究、教育、施設、社会貢献及び組織の将来像についての包括的な評価が行われるとともに、各専攻についての評価として、専攻の研究活動、教育プログラム、大学院理学研究科の構成、研究費、研究施設、社会貢献、今後の課題等についての個別評価が行われています。また、各専攻の評価に続き、技術部についても、活動状況、組織と運営、設備の状況、情報発信と社会貢献及び今後の課題についての評価がされています。



NEWS

医学系研究科が職場のメンタルヘルス講演会を開催

医学系研究科は、10月24日、医学部会議室において、「職場のメンタルヘルス」をテーマに講演会を開催しました。

これは、同研究科脳神経病態制御学講座の太田龍朗教授を講師として事務職員向けに行われたもので、他部局からの参加者も含めて約30名が参加しました。

太田教授は講演の中で「精神科は敷居が高く、かかりにくいと言われるが、このことが治療を遅らせるきっかけにもなっている。特に職場では話しづらいものであるが、何かあれば、もっと気軽に病院にかかってもらいたい。最初の発見までが長引くと、後々の治療が困難となるので、早期発見、早期治療が非常に大事である」と繰り返し強調するなど、精神医学の歴史、特性、精神疾患の原因から、治療のタイミングや予後等について分かりやすく説明し、受講者にとって、精神の病をより身近な問題としてとらえるきっかけとなりました。

NEWS

医学系研究科が看護学専攻、医療技術学専攻及びリハビリテーション療法学専攻の設置記念式典を挙行

医学系研究科は、平成14年４月に設置された修士課程（看護学専攻、医療技術学専攻及びリハビリテーション療法学専攻）の設置記念式典及び祝賀会を、10月４日に市内において挙行し、学内外の関係者約200名が出席しました。

式典は、宮原 同研究科教授の開式の辞に始まり、勝又 研究科長の式辞、松尾 総長のあいさつ、村田貴司 文部科学省高等教育局医学教育課長（倉田　裕 医学教育課課長補佐が代読）及び藤岡正信 愛知県健康福祉部理事の祝辞に続き、新道幸恵 日本看護系大学協議会会長、熊谷和正 日本放射線技師会会長（早川紀和理事（愛知県診療放射線技師会会長）が代理）、岩田　進 日本臨床衛生検査技師会会長、奈良　勲 日本理学療法士協会会長及び杉原素子 日本作業療法士協会会長から、各専門領域の発展の歴史、現在の状況及び将来への展望を含む意義深い祝辞が述べられました。

続いて行われた祝賀会では、二村 医学部附属病院長のあいさつに続き、加藤延夫 前総長及び永川宅和 金沢大学医学部保健学科長から祝辞が述べられた後、参加者は３専攻からなる修士課程の設置を祝いました。

▲松尾総長あいさつ

▲式辞を述べる勝又研究科長

▲加藤前総長の祝辞（祝賀会）

NEWS

医学部医学科公開講座を開催

スポーツと健康：パートⅡ－生涯健康をめざして努力すれば報われる?－

医学部では、10月11日に「スポーツと健康」をテーマに、平成14年度医学部医学科公開講座を名古屋市公会堂で開催しました。

21世紀を迎え高齢化社会が進む中、遺伝子治療や再生医療などの高度先進医療のみならず、老化による障害や生活習慣病の予防はますます重要となってきており、昨年度はパートⅠとして、体の老化や生活習慣病とはどのようなことかを学び、運動がどう役に立つかを知って、少しでも生活のなかで実践できるような講座としました。今年度はパートⅡとして、肥満や糖尿病、高血圧、心筋梗塞及び脳血管障害などの予防や治療としてのスポーツを取り上げましたが、医療関係者、会社員、主婦等の20代から80代にわたる幅広い年齢層の約80名が受講、質疑応答も活発に行われ、終了時間を大幅に超過する盛況となりました。

《司会・コーディネーター》

医学部保健学科　基礎理学療法学講座教授　猪田邦雄

「高脂血症ならびに動脈硬化症と生活習慣」

医学系研究科　発育・加齢医学講座教授　葛谷雅文

「心疾患や高血圧とつき合う方法」

医学部保健学科　病体理学療法学講座教授　山田純生

「肥満、糖尿病の予防と運動」

総合保健体育科学センター保健科学部教授　佐藤祐造

NEWS

環境医学研究所が国際シンポジウム及び外部懇話会を開催

環境医学研究所は、10月11日、シンポジオンホールにおいて、国際シンポジウム「変貌を続ける環境とヒトのからだ」を開催しました。

このシンポジウムは、２年に１回同学研究所が主催しているもので、今回は同研究所の外部懇話会委員（５名、うち外国人委員４名）も含め、学内外から約120名が参加しました。

シンポジウムでは、はじめに松尾総長からあいさつがあり、続いて同研究所の共通の目標である「環境変化に対する生体適応と破綻のしくみ」について、国内外他施設との共同研究の成果を交えた発表と討論が行われました。

Session Ⅰ（環境ホルモンと酸素ストレス）では、井口泰泉　岡崎国立共同研究機構教授による招待講演「化学物質と環境：日本における内分泌かく乱化学物質に関する問題」があり、Session Ⅱ（心臓のストレス応答）では、３名の外国人研究者（イギリス、オランダ、アメリカ）から心臓のイオンチャネルとリモデリングについて同研究所との共同研究の成果が紹介されました。Session Ⅲ（神経系のストレス応答）では、片渕俊彦　九州大学講師による招待講演「ストレス免疫応答の中枢機序」が行われました。Session Ⅳ（特殊環境シミュレーション）では、スイスの共同研究者による招待講演「宇宙における細胞生物学」が行われ、また同研究所宇宙医学実験センターに設置されている大型実験施設（直線加速度負荷装置など）を用いた研究の成果が紹介されました。

なお、同シンポジウムに引き続き、グリーンサロン東山ミーティングルームにおいて開催された第４回環境医学研究所外部懇話会（外国委員４名、国内委員６名）では、最初に妹尾研究所長が研究活動状況、財政、施設等、また、法人化への取組みについて説明し、これに対して各委員から様々な提言が寄せられました。特に外国人の委員からは、今後の附置研究所のあり方に関して率直で建設的な発言多く出され、活発な意見交換が行われました。

▲外部懇話会

NEWS

附属図書館が企画展示を開催
古書は語る－館蔵の江戸文学資料を中心に－

附属図書館は、10月16日から31日までの15日間、展示室において、企画展示「古書は語る－館蔵の江戸文学資料を中心に－」を開催しました。この展示会では、はじめて和古書に出会う人にも、江戸時代の文学に親しみ、読書体験をしてもらうため、一部の資料は実際に手に取って読むことができるよう、机といすを用意したコーナーを設けました。このような展示方法は初めての試みで、展観に訪れた人たちは、手で触れる喜びを味わいながら、いすに腰掛け、熱心に和装本と向き合っていました。

特集として、挿絵入りの江戸時代の大衆小説、浮世草子をとりあげました。他に、神宮皇學館文庫の中から、お伊勢参りに来た人々をもてなした伊勢の御師と呼ばれる人たちが残した献立帳や帳簿などの面白い資料なども紹介しました。

10月26日には、展示会協力者の塩村 耕 文学研究科助教授を講師としてギャラリートーク（資料解説）が行われ、100名以上の参加者は、ユーモアを交えた軽妙な解説に聞き入っていました。展示を見てからギャラリートークを聞きたいと朝早くからきた人もおり、期間中の展観者は総数で658名でした。

なお、インターネットを介した電子展示も公開されていますので、ご覧ください。

（http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/event/tenji/2002/kagami.html
又は、図書館のホームページ
（http://www.nul.nagoya.-u.ac.jp）→電子コレクション→ H14年度企画展示会）

NEWS

農学国際教育協力研究センターがオープンセミナー(第７回･第８回)を開催

農学国際教育協力研究センターは、10月17日、「JICAのAICAD（アフリカ人造り拠点）プロジェクトに参加して考えさせられたこと－大学退職者が体験したODA－」をテーマに2002年度第７回オープンセミナーを開催し、大学院生を中心に約20名が参加しました。

セミナーでは、同プロジェクトの長期専門家として昨年４月から本年４月までの１年間、ケニア国ナイロビに赴任された山本禎紀 広島大学名誉教授を講師に招き、ODA予算、国際協力事業団（JICA）の専門家の種類と役割、AICADプロジェクト内容について、それぞれの説明とともに体験に基づく問題点が指摘されました。

また、10月24日には、ウガンダのマケレレ大学獣医学部公衆衛生学科長であるジョージ･ナシンヤマ 同センター客員教授を講師として、「アフリカにおける　獣医学教育：その変遷、挑戦そして戦略」をテーマに、第８回オープンセミナーを開催しました。アフリカで獣医大学が設立された歴史的な背景、アフリカで必要とされる獣医師像、大学での獣医師教育実施における問題点とその改善方法、そして地域別の大学間のネットワーク形成の重要性について説明があり、約10名の参加者が活発な意見交換を行いました。

▲第７回

NEWS

法学研究科がウズベキスタンにおいて学生海外研修を実施

法学部・法学研究科では、９月24日から10月１日までの８日間、学生海外研修として、ウズベキスタンの学術交流協定先であるタシケント国立法科大学、世界経済外交大学及びサマルカンド国立大学法学部を学生18名、引率者５名が訪問しました。

この研修は2000年度からモンゴル、ベトナム及び中国において実施されてきたもので、法整備支援や環境問題等の社会的・学問的な話題について、学術交流としてウズベキスタンの学生と議論を行うとともに、文化交流として日本の文化を紹介しました。学術交流では積極的な質疑応答が行われ、文化交流では、持参した浴衣を着てウズベキスタンの学生と一緒に郡上踊りを楽しむ等、活発な交流を行いました。

また、研修中には、大学訪問だけでなく、国会、地区民刑事裁判所、最高裁判所、最高経済裁判所、日本国大使館、JICAウズベキスタン事務所、日本センター等を訪問し、ウズベキスタンの政治・法律制度や、ウズベキスタンにおける日本の国際協力の状況について説明を受け、裁判所では実際の刑事裁判を２件傍聴することができました。

今回の研修では、日本ではまだ馴染みの薄いウズベキスタンの社会、文化、歴史について経験的に理解を深めることができ、学生にとって貴重な体験ができました。今後もこのような学生海外研修が継続的に行われ、本学と学術交流協定校との人的交流の進展が期待されます。

NEWS

愛知地区国立学校等退職準備セミナーを開催

平成14年度愛知地区国立学校等退職準備セミナーが、10月25日、本学と愛知教育大学・名古屋工業大学・豊橋技術科学大学・豊田工業高等専門学校・岡崎国立共同研究機構の５機関との共催により、経済学研究科第二講義室において開催されました。

このセミナーは、愛知県に所在する国立学校等の文部科学省共済組合員で、平成14年度から平成18年度までの定年等退職予定者及びその配偶者を対象とし、退職に当たっての心構えと退職後の生活設計に必要な知識を提供することにより、将来への不安を解消し、今後の社会生活、家庭生活の基盤づくりに役立てることを目的とした“退職準備型セミナー”として毎年開催しているもので、今年度からは愛知地区の５機関を加え、112名が参加しました。

今回のセミナーでは、佐藤祐造 本学総合保健体育科学センター教授から「定年後の健康管理と健康増進」と題して生活習慣病予防のための運動療法について、また、木村好男 住友信託銀行財務コンサルタントから「これからの経済・生活設計」と題して退職後の資産管理のあり方についての講演が行われ、その後、事務担当者による退職後の医療制度、退職手当、退職共済年金制度等の説明があり、参加者は熱心に聴講しました。

▲あいさつをする関総務部長

▲講師の説明に熱心に耳を傾ける参加者

NEWS

日本新聞協会と「新聞大学」を共催

第55回新聞大会が名古屋で開催されることを記念して、本学における社会連携の一環として、10月16日、工学研究科１号館において、「新聞大学」を社団法人日本新聞協会との共催で開催しました。

これは、大学生を対象に、新聞により親しんでもらうとともに新聞を通して社会との関わりにおける問題意識を高めることを目的として開催されたもので、第１部は東海地区の大学生５名が新聞に対する意見を自由に述べました。第２部では「大学と社会をつなぐ新聞の役割」をテーマにパネルディスカッションが行われ、布施　哲 言語文化部助教授、理学部と情報文化学部の学生２名、中井昌幸 トヨタ自動車広報室長、家本賢太郎 クララオンライン社長及びZIP-FMナビゲータのケン・マスイ氏の６名で、新聞の社会での役割、学生と新聞の関わり等の議論が行われ、学生や一般市民等約100名が熱心に議論に聞き入るとともに、活発な意見交換を行いました。

NEWS

医学部、献体者の冥福を祈り解剖弔慰祭を挙行

医学部は、10月17日、市内において平成14年度名古屋大学医学部解剖弔慰祭を行いました。

この弔意祭は、医学の教育研究のために献体された故人を慰霊するため毎年行われているもので、今年度も御遺族をはじめ、教職員、学生ら約400名が参列し、故人の御冥福を祈りました。

式典では、勝又医学部長から「提供いただいたご遺体に深く感謝するとともに、医学医療の進歩発展及び医師医学研究者の育成のために一層努力する覚悟である」と慰霊のことばが述べられました。また、学生を代表して藤井健太郎君が「人生を全うされ、なお、後の医学の発展に貢献されるという故人の強い思いが私たちの心に深く残っています」と感謝の言葉を述べ、明日の医学医療を支える者として努力を怠らないことを御霊と遺族に誓いました。

式典に引き続き、解剖供養塔に御遺族、教職員及び学生が参列し、納骨を行いました。

なお、今回供養された献体数は、系統解剖41体、病理解剖46体で、医学部創設以来の献体総数は16,514体となりました。

▲あいさつをする勝又医学部長

NEWS

平成14年秋の叙勲、褒章受章者決まる

― 本学関係者８名が受章 ―

平成14年秋の叙勲及び褒章の受章者が発表され、本学関係者では次の方々が受章されました。

《叙勲》
勲三等旭日中綬章
山下龍二　名誉教授（文学部）
勲三等旭日中綬章
神谷　功　名誉教授（教養部）
勲三等旭日中綬章
赤﨑　勇　名誉教授（工学部）
勲三等旭日中綬章
樋口敬二　名誉教授（大気水圏科学研究所）
勲三等瑞宝章
柴田　賢　元名古屋大学教授
（年代測定資料研究センター）
勲五等瑞宝章
山口　宏　元医学部附属病院放射線部診療放射線技師長

《褒章》
紫綬褒章
三田一郎　大学院理学研究科教授
紫綬褒章
山本　尚　元名古屋大学教授（現シカゴ大学教授）

NEWS

職員創作美術展開催

― 延べ300人近い職員等が鑑賞 ―

平成14年度名古屋大学職員創作美術展が、10月22日から10月25日までの４日間、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この美術展は今年度で11回目を迎え、職員自ら創作活動を楽しみ、美術作品等の鑑賞を奨励するとともに、潤いのある情操豊かな生活、余暇の一層充実した活用を促し、生活に根ざした文化の普及・高揚に資することを目的として開催されているもので、出展種目も絵画、絵手紙、書道、写真、陶芸、手工芸及び俳句と幅広く、多くの力作が展示され、鑑賞に訪れた人達は、芸術の秋を心ゆくまで満喫していました。

▲作品を鑑賞する職員

都市の地震防災力向上のための コト・モノ・ヒト作りの研究

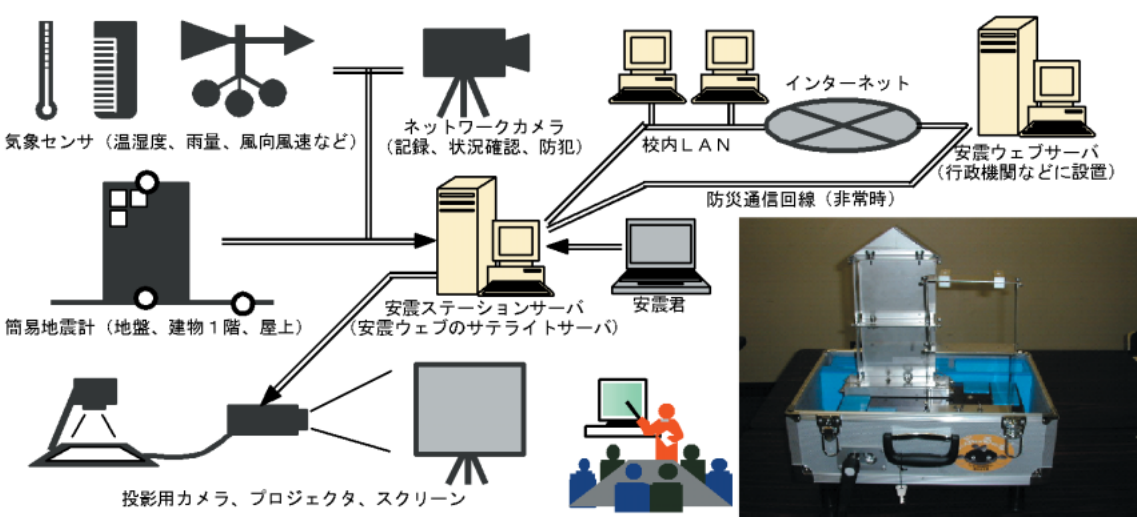
福　和　伸　夫

1995年兵庫県南部地震を契機として、政府地震調査研究推進本部と中央防災会議が両輪となって、我が国の地震調査研究を推進してきた。地震調査研究推進本部では、平成16年度末までに全国を概観する地震動予測地図を作成するために、主要活断層の調査と長期評価、大規模堆積平野の地下構造調査などを精力的に進めている。その一環として、昨年９月には、東南海地震の長期評価結果が公表され、今後30年に50%、50年に90%という高い地震発生確率が示された。一方、中央防災会議は、東海地震や東南海地震・南海地震の震度予測や被害予測を実施し、今年４月23日には東海地震の地震防災対策強化地域を拡大し名古屋市も強化地域に編入した。また、７月26日には東南海地震・南海地震に係わる地震防災対策の推進に関する特別措置法を公布した。地震活動期を迎え、東海・東南海・南海の３つの巨大地震に加え、兵庫県南部地震のような都市直下での地震の続発が懸念されている。このような状況下、名古屋大学の地震学・地震工学研究者も、環境学研究科の安全安心学研究プロジェクト（プロジェクトリーダーは藤井直之地震火山観測研究センター長）を中心に精力的な取り組みを始めつつある。

地震防災研究は真理探究と問題解決を並行して実施すべき研究課題であり、現象解明のための「コト」を明らかにする研究に加え、問題解決のための「モノ」作りのシステム化研究、防災意識啓発や技術者教育などの「ヒト」の仕組み作りが必要となる。以下には、「コト」「モノ」「ヒト」の観点から、筆者周辺の最近の研究活動を紹介する。

１．コト作り：強震時の都市－建築物－地盤系の挙動解明に関する研究

地震災害に対して安全な都市環境を実現するには、強震動の解明に加え、建築物の地震応答と耐震性能を明らかにし、耐震設計技術を構築したり、的確な都市



▲小学校防災拠点システム「安心ステーション」と携帯手回り振動台「ぶるる」

の防災施策を立案することが必要となる。そこで、堆積平野の地下構造の解明、強震動の予測、地震被害の予測研究を推進すると共に、建築物－地盤系の地震時挙動の解明、建築物の耐震・免震・制震技術の開発、地震応答解析法の開発などの一連の研究を実施している。また、名古屋大学は、東海３県の強震観測機関を相互接続した大都市圏強震動総合観測ネットワークシステムや、世界屈指の高密度な地盤・建物強震観測システムを有しており、東海地区の地震防災研究や、我が国の耐震化研究の基礎を支えている。

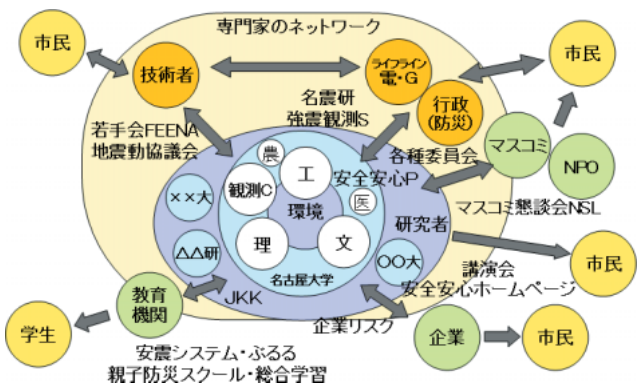
２．モノ作り：都市の地震防災や災害情報に関するシステム化研究と防災教材作り

地震防災に係わる膨大な知識・データを活用し都市防災力を向上させるために、地理情報システム（GIS）や強震観測を活用した様々な災害情報システムを他に先駆けて開発してきた。最近では、センシング・通信・情報機器を組合せた「安震君」とウェブ GIS からなる双方向災害情報システム「安震システム」や、小中学校の防災拠点化を図った「安心ステーション」などを開発している。また、防災教育の改善のために携帯型振動台「ぶるる」を開発し、多方面で実験教材として活用されている。

３．ヒト作り：地域協働による防災力向上に関する人作りと地域ネットワーク構築の試み

地域防災力の両輪は、地域の防災技術力と市民の防災意識であり、技術力向上のための専門家の協働や、市民の意識啓発のための人間ネット形成の仕組み作りが重要になる。そこで、地域の防災技術者向けの名古屋地域地震防災研究会や、耐震技術者向けの名古屋地域防災耐震研究会を主宰している。また、市民との媒介役となるマスメディア・自治体・NPO 代表者向けに NSL（Network for Saving Life）と呼ぶ勉強会を毎月開催している。これらの地域協働の仕組み作りは地震活動期を迎えた地方中核都市の防災力向上のための協働モデルの雛形になっており、「中京圏における地震防災ホームドクター計画」として本年度の地域貢献事業にも採択されている。

本年９月には、災害対策室（室長・安藤雅孝教授）が学内措置で設置された。名古屋大学は、東海地域の地震災害対策の拠点になると共に、大都市の地震防災研究のモデル作りを通して、世界の地震災害軽減に寄与しようとしはじめている。



▲名古屋大学を中心とした防災ネットワーク

プロフィール

ふくわ　のぶお

昭和32年愛知県生まれ。昭和54年名古屋大学工学部卒業、昭和56年名古屋大学大学院工学研究科博士前期課程修了。同年清水建設㈱大崎研究室研究員、平成３年名古屋大学工学部助教授、平成９年先端技術共同研究センター教授を経て、平成13年から大学院環境学研究科教授。現在、中央防災会議東海地震対策専門調査会、愛知県地震対策有識者懇談会、東海地震・東南海地震等被害予測調査検討委員会、名古屋市滞留者等対策シミュレーション検討委員会などを通し、東海地域の地震防災対策に携わる。

新任部局長等の紹介

●総長特別補佐

中島　　泉
（なかしま　いずみ）
昭和15年４月24日生
昭和14年10月16日発令
（略歴）
昭和45年４月
　名古屋大学助手（医学部）
昭和50年１月
　名古屋大学助教授（医学部）
昭和56年５月
　名古屋大学教授（医学部）
平成９年４月
　名古屋大学医学部長（～11．３.31）
平成12年４月
　名古屋大学教授（大学院医学研究科）
平成14年４月
　名古屋大学教授（大学院医学系研究科）
平成14年10月
　名古屋大学総長特別補佐
　（14.10.16～16．３.31）

●医学部附属病院長

大島　伸一
（おおしま　しんいち）
昭和20年９月７日生
平成14年11月１日発令
（略歴）
昭和45年４月
　社会保険中京病院嘱託臨床研修医
昭和46年４月
　社会保険中京病院泌尿器科医師
平成９年１月
　名古屋大学教授（医学部）
平成12年４月
　名古屋大学教授
　（大学院医学研究科）
平成14年４月
　名古屋大学教授
　（大学院医学系研究科）
平成14年11月
　名古屋大学医学部附属病院長
　（14.11．１～16．３.31）

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（14年10月分）

	記　　事	月　日	新聞等名
1	名大サロン　初会合で教員60人参加　ワイン傾け自由に談議	10. 2（水）	読売
2	老年学：発作解決策、自分で探る　井口昭久・医学系研究科老年科教授	10. 2（水）	朝日（朝刊）
3	肺炎から高齢者守れ！　新たな予防医療名大病院で開始　肺炎球菌ワクチンによる予防接種普及目指す	10. 2（水）	中日（夕刊）
4	予算重点配分　「21世紀 COE（卓越した拠点）プログラム」　世界最高水準の研究教育拠点作りのため　50大学113計画選定　名大「３位」　７件採択	10. 3（木） 10. 4（金） 10. 5（土）	読売 他４社
5	野依良治教授のオンリーワンに生きて NO. 26：教育には厳しい実体験が大切	10. 3（木）	読売
6	医学部附属病院　次期病院長に大島伸一・副病院長（泌尿器科学）を選出	10. 3（木）	朝日（朝刊） 他２社
7	医学部附属病院手術ミスで事故調査委提言　『体制や技術問題あった』	10. 3（木）	中日（朝刊）
8	文科省　地域貢献特別支援事業　名大は地震警報・名工大は陶器産業育成が選定された	10. 5（土）	日経（朝刊）
9	中部ひと維新：再生医療の第一人者、産業化を推進　患者に喜ばれてこそ医者　上田実・医学系研究科教授	10. 5（土）	日経（夕刊）
10	標高5000メートル　星の一生探る　理学部天体物理学研究室・福井教授は名大電波望遠鏡『なんてん』をアンデス山中移設　世界に先駆けサブミリ波を観測	10. 5（土）	中日（夕刊）
11	今週の動き：ノーベル各賞の発表　７日から　昨年ノーベル化学賞を受賞　野依良治教授	10. 7（月）	中日（朝刊） 日経（朝刊）
12	地球貢献特別支援に着手　名大10件、名工大４件の事業で　名大のプランのキーワードは「高度な知的財産を社会貢献に」	10. 8（火）	日刊工業
13	新聞時評：金融システムの解説を掘り下げて　奥野信宏教授	10. 8（火）	毎日（朝刊）
14	編集部より：『新聞大学』に集まれ！　学生と新聞の接点を探る催し　（日本新聞協会主催、名古屋大学共催）	10. 8（火）	中日（朝刊）
15	医学部公開講座「スポーツと健康・パートⅡ」　講師は猪田邦雄・医学部教授ら４人	10. 8（火）	中日（朝刊）
16	名古屋大教育学部が名大附属中学と高校の募集要項を配布　両校体育館で学校説明会を開く	10. 9（水） 10. 11（金）	読売 中日（朝刊）
17	パパも育休取ってみようよ　職場もエール　１ヶ月だけど　別姓も大学『問題なし』　今回育休を取った　田村哲樹・法学部助教授	10. 9（水）	中日（朝刊）
18	近況心境：日本地球化学会から功労賞　理学部の研究支援推進員・吉岡茂雄さん　ガラス理化学装置の専門家	10. 9（水）	朝日（夕刊）
19	作業着姿世界の頂点　ノーベル化学賞田中さん　野依良治教授、無名の受賞「若手に励み」	10. 10（木）	中日（朝刊） 読売
20	野依良治教授のオンリーワンに生きて NO. 27：人間性への回帰を	10. 10（木）	読売
21	第２回読売教育シンポジウム「大学改革、21世紀の『知の拠点』を目指して」　遠山敦子・文部科学大臣	10. 11（金）	読売
22	理学研究科教授会が、研究科長の後任に大峯巌・同研究科教授を選出	10. 12（土）	中日（朝刊）
23	イラク攻撃示唆　米領事館に抗議　名古屋の市民団体「有事法制反対ピースアクション」（共同代表＝水田洋・名誉教授ら３人）	10. 12（土）	朝日（朝刊）
24	グライダー空域新設　桑名の空中衝突　現場さらに３分割　「学生の安全を考えれば新設はありがたい」中村佳朗・航空部顧問	10. 12（土）	中日（夕刊）
25	透析医療の現状は？　名古屋で腎不全講演会　名大病院在宅管理医療部、名古屋臨床疫学研究会主催	10. 12（土） 10. 14（月）	中日（朝刊）
26	16、17日名古屋で新聞大会　「新聞商品の魅力を高めるために」をテーマにパネルディスカッション　野依教授が「21世紀の『知』とは」をテーマに記念講演	10. 14（月） 10. 16（水） 10. 17（木） 10. 20（日）	読売 他４社
27	ほん：『教育行政改革への挑戦』　西尾理弘・元事務局長	10. 14（月）	毎日（朝刊）
28	野依良治教授が　ローマ法王庁科学アカデミーの会員に	10. 16（水）	朝日（朝刊） 他２社

	記　　事	月　日	新聞等名
29	事故再発防止へ報告書案を作成　医学部附属病院　上田裕一同病院の事故調査委員長は事故報告書の情報を、医療現場で共有する仕組みがほしいと指摘	10.16(水)	朝日(朝刊) 毎日(朝刊)
30	大学発ベンチャー（大学と企業が連携する動き）　CMC技術開発を岐阜大学教授が設立するなど中部でも連携広がる　ジャパン・ティッシュ・エンジニアリングを上田実・医学系研究科教授が設立、INAX が出資	10.16(水)	日経(朝刊)
31	老年学：医者と患者も人間同士　井口昭久・医学系研究科老年科教授	10.16(水)	朝日(朝刊)
32	文化：理数教育の今と教科書　『最低基準』＋選択の余地を　浪川幸彦・多元数理科学研究科教授	10.16(水)	中日(夕刊)
33	診療科超えた協議会設置を　名大の医療事故調査委が提言	10.16(水)	中日(夕刊)
34	中部地域活性化の「鍵」探る　日本列島の中心部　優れた交通の利便性や豊かな水資源　どう生かすか　奥野信宏教授	10.17(木)	毎日(朝刊)
35	排尿障害　まず診察を　愛知県が「管理マニュアル」作成　大島伸一・医学部泌尿器科学教授が出席	10.17(木)	読売
36	紙窓：クスノキは残るか　小さな神社のクスノキ「これを残すことは、愛知万博をサポートする良い話題となる」只木良也名誉教授	10.20(日)	中日(朝刊)
37	大学改革　21世紀の「知の拠点」を目指して　遠山文科相を迎えて第２回読売教育シンポジウム	10.21(月)	読売
38	科学を読む：ノーベル賞がもたらしたもの　「失敗」が常識を破る　池内了・理学研究科素粒子宇宙物理学教授	10.21(月)	朝日(夕刊)
39	名古屋人探検：マイクロセンサー原理発見と実用化①～⑤　毛利佳年雄・工学研究科教授	10.21(月) 10.22(火) 10.23(水) 10.24(木) 10.25(金)	名古屋 タイムズ
40	「表現を」「自信を」若者に期待と注文　ノーベル賞田中さん・野依さん対談　「よい種」育てる環境不足・田中耕一　後進の自立導くのが教育・野依良治教授	10.22(火)	中日(朝刊)
41	セクハラ処分撤回せよ　愛大・重すぎた！？教授の講義禁止『学問研究に影響』　不服申し立て名大でも２件　学内調査で立証困難？	10.23(水)	中日(朝刊)
42	日本地球化学会が年代測定総合研究センター技官の吉岡茂雄さんらを顕彰	10.23(水)	中日(朝刊)

	記　　事	月　日	新聞等名
43	名大「まちとすまいの集い」　第４回「環境問題と建築学」	10.23(水)	読売
44	近況心境：経済分析、欧州の視点大切に　山田鋭夫経済学研究科教授	10.23(水)	朝日(夕刊)
45	副院長は「白衣の天使」「医師だけが威張る時代は終わった」　医学部附属病院が次期副病院長に大原洋子・看護部長ら２人を選出	10.24(木)	朝日(朝刊) 読売
46	バイオマスの視点が重要　構造改革、余力あるうちに　松尾稔総長	10.24(木)	日刊工業
47	名大が全学同窓会設立　会員10万人以上　産学連携など社会との交流の拠点とする	10.25(金) 10.26(土) 10.28(月)	朝日(朝刊) 他４社
48	大丈夫？身の回りは　東海地震　我が家の耐震対策　福和伸夫・理学研究科教授が基調講演	10.25(金)	毎日(朝刊)
49	医学の現場から：高齢者の運動処方　ゆっくりと持続的に　島岡清・総合保健体育科学センター体育科学部教授のアドバイス	10.25(金)	中日(朝刊)
50	コーナーキック：名大サロン　お互いに自分の専門分野について語ろう	10.25(金)	中日(夕刊)
51	人間列島：新しい価値「創」り出す化学　野依良治教授	10.27(日)	読売
52	秋の野外実習　博物館が開催	10.28(月)	中日(朝刊)
53	漢字能力検定に県内で5540人挑戦　名古屋大学東山キャンパスが会場	10.28(月)	中日(朝刊)
54	工学研究科、先端技術共同研究センターのグループが、次世代MOSFET のチャンネル領域についてのプロセス技術開発、コンタクト新素材開発などでユニークな成果	10.29(火)	日刊工業
55	「危険性認識すべきだった」名大手術ミス調査委員会　事故防止へ８項目	10.29(火)	中日(朝刊) 他４社
56	男女共同参画　苦情処理制度　名古屋市が市橋克哉・法学部教授らに委員委嘱	10.29(火)	毎日(朝刊) 中日(朝刊)
57	新世紀型の都市を　中部都市再生研究会（会長･松尾稔総長）を設立	10.29(火)	中日(朝刊)
58	野依良治教授講演会　名古屋電気学園創立90周年を記念して	10.29(火)	中日(朝刊)
59	学生街ダンス：秋休みに卒業旅行　北の大地で自然満喫　名古屋大４年　林弘子	10.29(火)	中日(朝刊)
60	COE プログラム研究費配分決まる　京大、最多19億円　名大に７億1600万円	10.30(水)	中日(朝刊) 他４社
61	研究者27人に助成金　研究助成部門は、中山浩・工学研究科機械工学専攻助手ら７人	10.30(水)	中日(朝刊)

	記　　事	月　日	新聞等名
62	老年学：死期迫る母へ機上の涙 井口昭久・医学系研究科老年科教授	10.30(水)	朝日(朝刊)
63	脳卒中携帯端末で救急対応　医学部脳神経外科（吉田純教授）・KDDI 研究所が開発	10.30(水)	中日(朝刊)
64	豊橋技科大の西永学長 「統合、早くても05年度」 名古屋大もしくは、浜松医科大・静岡大との統合を検討	10.31(木)	朝日(朝刊)
65	第50回論文賞に浅井滋生・工学部教授らの６編　金属学会	10.31(木)	日刊工業
66	子どもたちの可能性開く　第34回中日教育賞４人７団体に贈呈　的場正美教授らが祝辞	10.31(木)	中日(夕刊)

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは企画広報室にお寄せください。

総務部　企画広報室　企画広報掛
電話：052（789）2016
FAX：052（789）2019
E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

ちょっと名大史

⑦愛知県立医学専門学校跡

前号（連載第６回）でも紹介しましたように「愛知県病院・医学講習場（公立医学所）」は1873年５月に西本願寺掛所（別院）で復興しましたが、約４年後の1877年７月に、当時の名古屋町域の西端を流れていた堀川の東岸、天王崎町にあった旧名古屋藩士千賀家の屋敷跡地（現中区栄一丁目）に移転しました。前の西本願寺も当時の名古屋の南端にあたっており、最初の名古屋城正門の真向かいにあった時と比べ、不便な位置に移されたことになります。これは当時の病院に対する忌避意識、すなわち「伝染病がうつるのではないか」という一般人の恐怖感・忌避感に押されて、名古屋の町のはずれに建てられたと思われます。

しかし、この移転によってはじめて、新築の医療と医療教育専門の専門施設が建てられました（それまでは既存の建物を修築して利用していました）。約五千七百坪の敷地の正面に病院診療棟１棟、北に医学校舎としてコの字形の教場棟１棟と塾舎４棟、その南に翼状の病棟３棟が並ぶ、当時としては立派な疑似洋風建築でした。

移転後はじめの約７ヶ月間は、学校は休講措置をとっていましたが、翌1878年２月に学校の新規則が制定されたのをうけ、再び開校されました。そして同年４月公立医学校と改称、それまでは病院の付属施設でしたが、ここにおいて独立した機関となりました。さらに1879年にはそれまでの中等教育機関から高等教育機関である「専門学校」に格上げされ、1903年３月には愛知県立医学専門学校と改称されました。そして1914年３月に現名古屋大学医学部鶴舞キャンパスに移転するまでの約37年間、この地で医療教育と医療活動を続けました。

▲現在の景観

▲当時の写真

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物に関する情報をお持ちでしたら、大学史資料室（052-789-2046）へご連絡下さい。

古紙配合率100%再生紙を使用